

類聚名義抄の和訓「ノチ」をめぐって

白井清子

キーワード…「のち」、名義抄和訓、時空表現、

「さねかつら」、雌雄

この小稿は、「のち(後)」が空間的意味から時間的意味に変化した語であることを『観智院本類聚名義抄』の和訓から確認し、あわせて「鬘」「雌」の和訓にノチがあることの意味を探るものである。

一

『観智院本類聚名義抄』(以下、名義抄と略記)でノチの和訓が施されている漢字には次のようなものがある。

往・後・以後・下・昆・晚・后・末――(a)
(これ以外に「其後ソノノチ」がある。)

このうち、声点のついているのは、「往」「末」のみ
たつていずれも平平である。

ところが、このほかにノチの訓を持つものとして、次の項目がある。

鬘 倭也(「後」と傍記) エラフ 大髪也

タチガミ ノチ メサシ(仏下本三七) ー (b)

(ノチのアクセントは平平)

雌 メドリ ノチ マク(僧中二三三) ー (c)

(ノチのアクセントは平平) (注1)

(a) (b) (c)のノチのアクセントはいずれも平平であるから、ここに掲げたノチはいずれも同一の語であるから、ここに掲げたノチはいずれも同一の語である。

る可能性が高い。ただ、一見した限りでは、(b)や(c)は(a)とすぐに結びつかない。(b)や(c)になぜノチの訓が付いているのか。それを考えるためにまず一般的なノチの用法を確認しておくことが必要である。

1 笹葉に 打つや霞の たしだしに「確力ニ」 平
(る) 寝てむのち(能知)は 人は離(か)ゆとも

△古事記歌謡・七九▽

2 ありさりてのち(能知)も逢はむと思へこそ露の
命も継ぎつつ渡れ △万葉集・卷一七・三九三三▽

3 むまのときよりのちに△土左日記・一月一四日▽

これらは、「ある時点を基準にして、それ以後ずっと続く時間」の意味である。ノチという語はこのように古くから時間的な意味を表していた。

ノチは次のようにも使われる。

後代の意で、

4 古(いにしへ)の 賢しき人も のち(後)の世
の鑑(かがみ)にせむと

△万葉集・卷一六・三七九一▽

死後の意で、

5 のちの御諡(おくりな)

△栄花物語・卷一・月の宴▽

仏教でいう三世のうちの後世の意で、

6 のちの世の「タメノ」勤め「仏道修行」もいと
よくして

子孫の意で、

△源氏物語・若紫▽

7 元輔がのち △枕草子・五月の御精進のほど▽

後産の意で、

8 おのごにて物し給へば、嬉しうおぼす程に、や
がてのちの御事なくてうせ給ぬ。

△源氏物語・若紫▽

死後の葬儀や法事の意で、
9 のちのわざなどにも、こまかにとぶらはせたまふ。

△源氏物語・桐壺▽

4〜9のさまざまな意味はいずれも、1〜3の「ある時点を基準にしてそのあとに続く時間」の意味から拡大して出てきた用法である。4〜6は今あるいは生きているときを基準にしてそのあとに続く時間としての後代や死後、後世を意味する。7はある人のあとに続く人々である。8、9は出産や死去という大きなできごとのことと続いて起こったり、行われたりはある具体的なことからである。4〜9のノチは直接にはある特定の時間であったり、ある具体的なことからであったりするが、そのいずれもが「ある時点を基準にしてそのあとに続く時間」としてのノチから派生的に生まれた用法である。

しかし、以上のような時間的用法とは全く違ったものとして、次のような例もある。

10 鴨川ののちせ(後瀬) 静けくのち(後) も逢はむ妹にはわれは今ならずとも

△万葉集・卷一一・二四三二V
この例の原表記「後瀬」は「のちも逢はむ」と続くので「のちせ」と訓まざるを得ない。とすれば、「瀬」にノチがかかっているわけであるから、「のちせ」とは「川の下流の瀬」であろう。つまり、ノチが空間的意味で使われているわけである。(注2)

ここで、(b)とした名義抄の「髻」にたちもどってみる。名義の注によれば「髻」は「大髻也 タチガミ」とあり、字形から推測されるとおり、髪に関する字である。そこで、「髻」を『大漢和辞典』で調べてみると、次のような意味が掲げられている。

一、① ながげ。髪の中の太く長い毛。

② たれがみ。子が父母につかへるかみかざり。幼時のたれがみに象って、髪の毛をたはねてこし

らへておき、父母の所用を辨する時に著けるもの。

③ すぐれる。ぬきんでる。

④ すぐれびと。ぬきんでた士。

⑤ たてがみ。

⑥ 猪のたて髪の長い毛。

(中略)

二、① えびすの名。

② たれがみ。

(以下、略)

すなわち、長い毛や、髪の中の特に長いものをいうのが中心の意味である。

こういうように、特に長い毛を意味する「髻」に名義抄でノチの訓がつけられていること、前に述べたように万葉集で「後瀬」というノチを空間的な意味で表現した言い方があったことを考えると、ノチの語に関しては以下のようなことが考えられる。

ノチはもともと、空間的に線状にずっと長く続いた先の部分をさすことばであった。それが川の場合は下流を意味し、髪の毛では特に長いものやずっと垂れ下がった部分をさした。

このように考えれば万葉集の次の表現もよく理解できる。

木綿裏(ゆふつつみ) 白月山(しらつきやま)のさ
なかつら(佐奈葛)のち(後)もかならず逢はむと
そ思ふ
△卷二・三〇七三△

この歌におけるようなサナカヅラ(サネカヅラも含む)に
関して、サナカヅラの蔓は分かれてまた合うものだから
ノチニアフまたはアフにかかるといふ説があるが(注
3)、この解釈は正確ではない。サナカヅラは蔓がずつ
と長くのびていくものである。その蔓のずつと長くのび
た部分がノチと表現されるものである。したがってサナ
カヅラといえはその長くのびたもの、つまりノチがすぐ
に連想されるのである。だからこそ三〇七三番の歌でノ
チの前にサナカヅラが歌われるのであり、サナカヅラは
アフにかかるといふよりもむしろノチの方にかかるとい
ふのである。ちなみにサナカヅラまたはサネカヅラが万葉集中
には三〇七三番の歌も含めて一〇例出てくる(ヤマサナ
カヅラを含む)。そのうち、ノチ毛逢ハムと続くのが五
例(卷一・二〇七、卷一一・二四七九、卷二二・三〇七
三、卷二二・三二八〇、同・三二八一)。そのほかの五
例は次のものである。

①木綿置(ゆふたたみ) 田上山(たなかみやま)のさ
な葛ありさりて「コノマズツト時ガ経ツテ」しも
かならずとも
△卷二・三〇七〇△

②丹波道の大江の山のさなかつら絶えむの心わが思は
なくに
△卷二・三〇七一△(注4)

③大船の思ひたのみてさな葛いや遠長く……
△卷二・三二八八△

④あしひきの山さな葛もみつまで妹に逢はずわが恋
ひ届(を)らむ
△卷一〇・二二九六△

⑤玉くしげみむろの山のさなかつらさ寝ずはつひにあ
りかつましじ
△卷二・九四四△

この五例のうち、①②③の例はいずれもサナカヅラの長
くのびて続いていることからそれぞれアリサリテ・絶エ
ズ・遠長クを導き出す表現として使われている。④はサ
ナカヅラの実が赤くなることからの表現らしい。⑤はサ
ナカヅラとの音の上のつながりからサネズハを導き出し
た表現である。サナカヅラが長くつづくものとしてとら
えられている①②③の例からみても、三〇七三番の歌で
はサナカヅラの蔓が長くのびた部分を意味するノチにか
かっているとみることが妥当であるといえる。(注5)

しかし、この線状にずつと長く続くものの先の部分を
示すノチの空間的意味はシモ(下)やスエ(末)に非常
に近い。したがって、ノチが時間的意味で用いられるよ
うになると、空間的な意味を表す用法はシモやスエにす

っかり譲ってしまった。

ノチは多くの辞書では時間的な意味についてのみ書かれ、ごく一部の辞書(注6)を除いては、空間的な意味について言及されていない。しかし、さきにもてきたとおり、ノチはいきなり時間的な意味が生じたのではなく、古くは空間的な意味をもっていたと考えられ、その点、空間的な意味から時間的な意味が発生したと考えられるマへ(前)・アト(後)・サキ(先)などの他の基礎語と同様であることがわかる。

三

次に、(c)の「雌 ノチ」について。「雌」は『大漢和辞典』その他の漢和辞典を調べても「めす・鳥のめす・まける・弱い」などの意味しかなく、この字にどうしてノチの訓があるのかわからない。そこで、ここらみに名義抄で「雄」の字を調べたところ次のようであった。

雄 ヲドリ スグル カツ ウルハン ヤトル
サキ ヨル ヲ

この名義抄の「雄」と「雌」の訓を比べてみると「雌」にノチの訓があるのもわかる。次のように対するのである。

「雄」
ヲドリ
メドリ
マク(負)
ノチ(後)

「雄」と「雌」を対峙させて考えたばあい、「雄」は勝つもので「雌」は負けるもの、「雄」は先に行くもので「雌」はのちに行くもの(あるいは行うもの)としてとらえていたのである。

『大漢和辞典』によると、動物の雌雄に関する代表的な四字の意味は次のように書かれている。

雄 ①おす・をんどり ②かつ ③まさる・すぐれる
④をさ・かしら・はたがしら ⑤傑士・達人
・勇者 ⑥ををしい・いさましい ⑦さかん(以下略)

雌 ①めす・鳥のめす・獣のめす ②まける・まけて用ひて差支ない。③左 ④をか(以下略)

牝 ①めす ②陰 ③右 ④谷 ⑤地(以下略)

名義抄では「牡」にはラケモノ・ヲウシが、「牝」にはメケモノが和訓として見えるだけである。また、名義抄でヲク・メクのかたちで対になっていると認められるも

のを調べたところ、次のようなものがあつた（生物ではない瓦にもヲ・メがついている）（注7）が、いずれにもカツ・マクやサキ・ノチのような和訓を見いだしえなかつた。

「ヲ〜」「メ〜」のかたちで対になっているもの

（括弧内の漢字は便宜的に記したもの。詳しくは注7を参照のこと。なお、オヒ（甥）・メヒ（姪）のヒは同一のものと確言できないが、今仮に掲げておく）

ヲ・メ（男・雄 妻・婦）

ヲウシ・メウシ（牛）

ヲカツラ・メカツラ（桂）

ヲガハラ・メガハラ（瓦）

ヲクチラ・メクチラ（鯨）

ヲケモノ・メケモノ（獣）

ヲヒ・メヒ（甥・姪）

ヲヒツジ・メヒツジ（羊）

ヲマ・メマ（馬）

ヲラシ・メラシ（鴛鴦）

「雄」「雌」の二字の場合、「雄」ではヲドリが「雌」ではメドリがそれぞれの和訓の一番はじめに掲げられているから、ヲドリ・メドリが代表的な訓であつたと推測

される。漢字の字形からみても漢字本来の意味がそこにあることがうかがわれる。その点では「牡」「牝」が獸の「おす」「めす」をあらわすのと区別される。『大漢和辞典』の「牡」の注記では「雄」と「牡」は鳥・獸の別にかかわりなく通じて使えらるとしている。しかし、実際には「牡」「牝」は獸類や牛に使われることが主で、広く一般的な意味で動物の「おす」「めす」を表す文字としては「雄」「雌」の二字が使われたのであろう。したがって、鳥の場合に限ってというのではなく動物一般の「おす」「めす」について、「おす」は勝つもので「めす」は負けるもの、「おす」は先に行くもので「めす」はのちに行くもの（あるいは行くもの）としてとらえていたのであり、あきらかに「おす」優位の前提に立っている。ちなみに、「男」「女」の字にはそういう区別は見当たらなかつたものの、「妻」にはウラム、「婦」にはシタガフの訓があることを考えれば人間の男女に関しても男性に高い評価が与えられていたであろうことは容易に推測できる。

注1 他の類聚名義抄諸本では、(b) (c) の記述に関して、鎮国守国神社本に(c)があるのみ。図

書寮本・高山寺本は (b) (c) いずれも欠けている。

注2 万葉集の次の「後瀬山」は地名であるが、「後瀬」の用法の裏付けとならう。

かにかくに人は言ふとも若狭道(わかさち)の後瀬の山の後も(後瀬山之後毛) 逢はむ君

△巻四・七三七▽

後瀬山後も(後瀬山後毛) 逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日までも生けれ △巻四・七三九▽

注3 『日本国語大辞典』(小学館) など

注4 ②の「丹波道の大江山のさなかつら絶えむの心わが思はなくに」△巻二・三〇七―Vのサナカツラは原文「真玉葛」で、マタマツラの訓もある。いま仮にサナカツラの訓で考えておく。

注5 つぎの歌の存在もサナカツラがノチにかかることを裏つける。

高円の野辺はふ葛(くす)のすゑつひに千代に忘れむわが大君かも△万葉集・巻二〇・四五〇八▽
注6 『岩波古語辞典』には「のち」が空間の意味から出たと書かれており、万葉集の「後瀬」の例が掲げられている。また、「髦ノチ 名義抄」と「のち」の項目の最後に記載されているが、ノチの他の

用法との関連については明言されていない。『大辞典』『日本国語大辞典』などには、ノチの意味として「うしろ」があげられているが、用例はない。「雌ノチ」に関して書かれた辞書は見当たらない。

『時代別国語大辞典 上代編』の「のちせ」の項には「ノチは時間的な意味にのみ使われるので、水の流れを時間的にとらえてノチセといつたものかともいわれる。第一、二例『万葉集二四三二、七三九の歌のこと——白井注』ともにノチモアハムの序になつているのを見ると、「見直し給ふのちせもやあらむ」(源氏・帚木)のような、未来の好機会といった意味をも含んでいたのではなからうか。ただし、瀬を機会・折の意に用いた例を上代ではほかに見ない。」とあるが、上代のノチセの解釈としては従えない。

注7 それぞれの漢字と和訓は以下のとおりである。

「ヲ」

男 ヲノコ ヲノコゴ ヲ

雄 ヲドリ スグル カツ ウルハシ ヤトル

サキ ヲル ヲ

「メ」

妻 メ ツマ ウラム アフ ト、ノフ

メアハス
 婦 ヨメ メ シタカフ
 「ヲウシ」
 牡 ヲケモノ ヲウシ
 倍 ヲウシ
 「メウシ」
 桴 メウシ ハ、ウシ
 「ヲカツラ」
 楓 カツラ ヲカツラ タカフ
 「メカツラ」
 桂 メカツラ カツラ カ、ル ヒサシ
 「ヲガハラ」
 牡瓦 ヲガハラ (甌 牡瓦)
 甌 ヲガハラ
 几 ヲカハラ
 「メガハラ」
 牝瓦 メガハラ
 磁 ヲガハラ
 「ヲクチラ」
 鯨 クチラ クシラ トモ アク ヲクチラ
 マス
 「メクチラ」

鯢 クチラ イカ メクチラ
 「ヲケモノ」
 牡 ヲケモノ ヲウシ
 「メケモノ」
 牝 メケモノ
 「ヲヒ」
 你 ナムチ イマ ヲヒ
 甥 ヲヒ 又メヒ
 姪 メヒ ヲヒ カホヨシ
 出 イツ イタス ヤメヲレタリ ツクル
 ヲヒ
 「メヒ」
 姪 メヒ ヲヒ カホヨシ
 姪女 メヒ
 姉 ヨメ ヒメ ヲト メヒ
 甥 ヲヒ 又メヒ
 「ヲヒツジ」
 善草 ヲヒツジ
 「メヒツジ」
 粉 メヒツジ
 「ヲマ」
 牡馬 チ、ムマ 一名ヲマ

駁馬 チムマ 一名ラマ

〔メマ〕

駁

メマ

(牝馬 メムマ 驢 同上)

〔ヲラシ〕

駕

ヲラシ

〔メヲシ〕

駕

メヲシ